

活気のある国語の授業を目指して

— 国語Ⅱにおける一年間の実践 —

川 越 淳 一

一 はじめに

二 単元設定の理由

- (1) 本校生の実態
- (2) 年間計画の中で位置付け
- (3) 年度当初の問題と単元のねらい

三 単元の展開

- (1) 二学年前半の流れ
- (2) 個人からの再出発——随想製作演習——
- (3) 緊張感と戦える力を——「青年の主張」の構想——
- (4) 個人の思いを全体へ——「青年の主張」大弁論大会——

四 全体のまとめと今後の展望

一 はじめに

私は教職七年を迎える。初めの三年間は副担任として一年生から三年生までを持ち上がり、二巡目は担任として一年生から三年

生まで持ち上がり、現在は再び一年生の担任である。七年という短期間に、総ての学年を異なる立場で経験し、しかも生徒と成長を共にすることが出来たという点で、大変恵まれたスタートだと感じている。中でも二巡目の三年間（昭和六十二年度～平成元年度）は、私自身、初めて担任を任されたという緊張した気持ちがあり、また、過去三年間の経験と反省を授業に反映させたいという決意があった。更に、この学年の国語科担当は、本校国語科十名の若い方から三名という構成であった為、三名とも不安と同時に、やる気・チームワークともに十分であった。そのため一学年の当初から徹底した教科会をもち、三年間を見通した年間指導計画を立て、またそのなかにそれぞれの個性を発揮すべく踏みだした学年でもあった。このようにやる気に溢れたスタートを切った訳だが、実際は計画通りには行かないことが多く、振り返れば、試行錯誤の中、やっと三年生を送り出すことができたというのが実態であった。今回は、その三年間の中の、昭和六十三年国語Ⅱに於ける一年間の実践の報告をさせて頂く。

二 単元設定の理由

(1) 本校生の実態

私の勤務する都城泉ヶ丘高校は、一学年が普通科九クラス、家政科一クラスの進学校である。また、都城地区は都城西高校と都城泉ヶ丘高校の二つの進学校の合同選抜であるため、この地区では比較的優秀な生徒が集まっている。したがって、非行等の問題点や授業以前の問題に悩まされるいわゆる教育困難校ではない。しかし、ほとんどの卒業生が進学するという学校の性格上、教科指導は大学入試を切り離して考えることは出来ない。そのため、毎朝英数国の早期テストに、放課後課外授業が組まれ、それに加えて毎週月曜日には「文字力テスト」が実施されていた。このシステムは六十二年度段階では一応成果（国立大学合格者数のうえで）をあげてはいたが、マンネリズムに陥り、学校の雰囲気沈滞させていたことも事実である。いわゆるテスト漬け、課外漬けで、自分で考える力を失い、また部活動等に参加する力を奪っていた訳だ。（その後見直されている。）すなわち、本校生の欠点は以下のようにまとめられる。

- 1 声小さく、積極性に乏しい。
- 2 語彙力が少なく、自分の考えが言えない。
- 3 学習に主体的に参加しない。
- 4 学習者の幼児化

現在もこの傾向はひどくなりこそすれ、改善されることは全くない。むしろ、高校生全体に「退化化」が生じているのではと危

惧されるほどである。これは、私自身が年を取り、学習者との距離が遠くなってきたことも一因かもしれないが、断言出来ることは「無気力・逃避型」の生徒の増加である。一昔前の生徒ならば、恐らく「反抗」という形で自己を表現したのだろうが、今の生徒には「反抗」する気力もなく、かといって勉強するでなく、一応親や教師のいうことは聞く。しかし、疑問や悩みを持っても「怒る」のではなく、「逃避」してしまう。これは、自分の疑問や悩みを消化する術を知らないからではないだろうか。年々増加する登校拒否の生徒の数が、このことを物語っていると言えよう。

しかし、生徒がただの「無気力」だけのものではないという確信はある。彼らは「やれない」のではなく「やらない」だけなのだ。こう信じるのは、時折、学校行事や部活動で、教室では見られない生徒のいきいきとした姿や、創造性を垣間見ることがあるからだ。可能性を持ちながら、それが決して授業という場だけでこない、これが本校の生徒の姿であった。

(2) 年間計画の中の位置付け

私が担当する二学年はメンバーが一年次と同様であった。私達引き続き学年をまかされた喜びと責任を感じ、昨年以上の決意をもって年間計画を立てた。特に第二学年は六単位が五単位に減少するため、教材の精選と、その効率的な指導を目標とした。五単位の授業で現代文、古文、漢文の総てを教えなければならぬことに加え、課外授業（週二時間）では早期テストの解説や問題集を消化しなければならない。そのため、どうしても時間に追わ

れてしまう。しかも教材が多くなると、生徒の視点は分散し、未消化の教材が出てきてしまいがちである。何のために、今これを学ぶのか、そして「何を学んだのか」という実感のないまま次の教材を機械的に消化し、しかも、前述の生徒の実態のため、受動的な一方通行の授業となり、整然としているが活気・やる気の感じられない状態となってしまうのである。

したがって、私は教科書教材を核にした自主単元を組み、それを「演習」と名付けた。そして、一斉授業とは違う形態の授業形式を学期に数回導入することによって授業に変化を持たせ、教師主導で単調になりがちな授業を活性化させようという試みを考えたのである。グループ研究や、作業、発表を中心とする演習によって、かえって前述の教材の多さや、指導時間不足を補えるのではないか。そして、演習と演習がつながりをもち始めれば、いわゆる普通の授業や問題集などの取り組みにも活気が生まれるのではないか。年に一度の打ち上げ花火ではなく、演習を重ねることによって「何か」が生まれるのではないか。そんな「希望」をこめて、私は演習を企画したのである。

(3) 年度当初の問題と単元のねらい

前述のように「演習」による授業の活性化を年間計画に組み込んだのだが、一学期はクラス経営上の問題点が多く、なかなか実行に移せないでいた。

授業を行う場としてクラスがあるのであるが、演習の成否はクラスの雰囲気作りで決まるといっても過言ではない。しかし、六

十三年度の場合、習熟度別クラス編成の弊害と思われる問題があった。

習熟度別クラス編成については、私は全面的に否定する気はない。自然クラスが最も適当であるのは当然だろうが、本校のように生徒の学力差が大きな高校で大学受験に対応できる力をつけようと考えると、ある程度の学力があるものはそれなりに伸ばしていかねばならないだろう。そのための学習効率を追及するならば、このシステムにはそれなりのメリットはある。ただ本校の場合、それが変則的であったということに問題があったといえるだろう。本校は普通科は九クラスであるが、選抜クラスは一学年三クラス、二学年四クラス、三学年二クラスという構成であった。二次次に枠が一クラス広がり、三次次にはその半分に減らされる。習熟度別クラス編成の場合、選抜に入ったものの中にも、入れなかったものの中にも問題が大なり小なり生じるのは当然だが、問題は二次次の普通クラスが顕著であった。一年次の授業などで、いわば「核」となってクラスを引っぱってくれた生徒が総て選抜クラスに吸収されてしまっていた。そのため、普通クラスには、なんともいえない暗い雰囲気、やる気の無さが漂っていた。また選抜クラスにも、旧選抜組と、新たに選抜クラスに参加したものの間に壁が存在していた。総てのクラスの生徒が一年次のクラスを懐かしがり、休み時間は旧クラスの者どうしがたむろする姿ばかりが目につく。これは異常であった。

こうした状態で私が担当したのは二・三・四組であった。三組が選抜クラス、二・四組は普通クラスで、私は二組の担任であっ

た。二組は女子が多く、四組は男子が多い。そのため雰囲気はかなり違っていた。二・四組には登校拒否の傾向のある生徒がそれぞれ一、二名おり、初めから前途多難な様相を呈していた。成績のほうも芳しくないのも当然で、私は何とかクラスを活性化し、生徒を覆っている無気力という暗雲を取り除こうと考えた。しかし担任が声高に「頑張れ、やる気をだせ」と叫んだところで何にもならない。私は担任として朝夕のホームルームの際、連絡事項の外に何か一言話しをしていたが、そのたび砂漠に言葉が吸収されてしまうような空しさを感じていた。また、合唱部顧問として放課後毎日練習のある私は、生徒と面接をする時間さえ確保することができない状態であった。生徒一人一人の状態を把握出来なまま、ただ時の過ぎることへのいらだち。クラスの状態がよくなくなってから、演習を実施しようと考えていたが、それもままならない。それではいけないだろうか。生徒と接する圧倒的に長い時間は授業である。クラス内が結束し、話し合わなければならぬ授業をすることによって、バラバラのクラスを固めたい、私はこのように考えるようになったのである。

こうして、私の二年次における演習のねらいは具体化していった。そしてそれは、一年次のねらいとは微妙に違ってきたのも事実であった。

「授業の力により生徒を活性化させる。そのために、話し合い、作業、発表しなければならぬ場に生徒を追い込む。そして生徒のやる気を引き出す。」

私は、沈滞した現状を破壊する起爆剤として、それを「授業」の場に求めたのである。

三 単元の展開

(1) 二学年前半の流れ

以上のような状態の二学期末、私は詩を素材とした演習を実施した。(なぜ現代詩を素材にしたか、詩の授業の活性化については「楽しくわかる高校国語Ⅰ・Ⅱの授業」(「あゆみ出版」一九九〇年八月二〇日)収録の拙稿を参照。)この演習は、現代詩三編をグループにより自由に解釈させ、研究発表を行うというものであった。生徒の反応は悪くなく、それなりの活性化はあった。特に選抜クラスの三組は積極的に取り組み、良いものが生まれた。その後の雰囲気にも活気が生まれてきた。しかし四組はいわゆる「ダメ班」を生む結果となり、その班の者の雰囲気はかえって悪化してしまった。その結果、夏休みが近付くと、勉強に対する意欲は失われ、遅刻、欠席が目立つようになった。(夏の課外授業では授業放棄という事態にまで陥ることになる。)一クラスでもうまく行かなければ演習は成功とは言いがたい。グループ学習のもつ魔力に指導者自身が頼り過ぎていたのかもしれない。二組は比較的順調と思えたのだが、留学生が転出してしまおうと気の抜けた状態になってしまった。「演習」という生徒自身が動かなければ何も生まれぬ場合は、かえってクラスの実態や問題点をくっきりと浮かび上がらせる結果となったのである。私は再び大幅な立て直

しを必要に迫られた。勝負は二学期であった。

(2) 個人からの再出発―随想集製作演習―

二学期は色々な意味で勝負を決するときである。授業は勿論のこと、クラスとしてもまとまり、積極性の要求される行事が目白押しだ。何事も初めが肝心なのだが、九月は学校行事のため大変授業がやりにくい。また一学期期末に集団学習の難しさを痛感していたこともあり、今回は個人を中心に据え、個人に蓄積された力を全体に広げる形をとうと考えた。そこで素材として取り上げたのが作文であった。たまたま取り上げていた教材が「あの夏あゝの海」という阿部昭の随想で、テーマは「父」であった。私はこの作品を中心に作文演習を企画してみた。

一 なぜ作文か

一学期を終えて、私には私自身の氣負いに対する反省があった。一学年末に漢詩を素材にした「漢文演習」や意見文集「青年の主張」を作り上げたということで、集団学習や作文技術については一年生なりに一つの到達点に達したという思いが私にはあった。当然、二年生では次の高みに上がって行けるものである。しかし、これは誤りであった。二年で相当数の生徒が入れ代わっている以上、総ては原点からのスタートが必要なのであった。一学期の「現代詩演習」では、私は彼らにクラスの状態以上のものを押し付けてしまい、結果として問題点が露骨に示されただけだった。いきなりクラス全体に活気を求めるのでなく、個の力をつけるこ

とが、全体の高まりの基礎となるのではないだろうか。彼らの内面に訴えたい何かがないのではないことは確かであった。教室では発言しない生徒も書かせれば何かを主張する。そのための手段が作文であり、当然これは学年末に予定している「青年の主張2」への布石であった。

また、私は「評価」の重要性を考えていた。一年次に私が行った文集製作では、製作過程が総てであり、その文集をもとにした発展がなかった。考えてみれば、例えば作文を書かせることは我々はよく実施することだが、この正当な評価となかなか出来なことが多く、時間的制約もあり、せいぜい数箇所を添削したりにとどまり（これだけでも大変な時間がかかる）不十分に終わってしまう。そのため、私は作文の正当な評価とその効率化ということを考えていた。簡単に言えばいかに教師が手を抜くかである。

言葉は悪いが、現実の教育現場を考えると、この「手を抜く」という思想は大変重要なものだと痛感している。これはけっして指導の質を落とすという意味ではない。現場の教師は驚くほどの雑用に追われている。雑用といえども大切な仕事であることに変わりはない。（特に、担任、部顧問のある私は限界であった。）こんなときに時間と情熱を頼りとする指導をしようとする、教師自身が行き詰まってしまうことは過去の苦い経験から感じていたことであった。そして、「忙しくてなかなか……」という言い訳をするようになってしまふのは目に見えている。今の私に必要なのはより強力な情熱でなく、僅かの情熱でも効率良く指導

が出来る技術の確立だと信じている。

すべての学習活動になんらかの正当な評価が下され、授業の場で位置付けられるならば、生徒も積極的に学習に取り組みようになるのではないだろうか。今回はその実験的側面も強かった。

二 指導の実際

《第一時》 随想「あの夏あの海」学習後、随想集を製作することを説明「あの……あの……」(……の部分は自由)または「父」のどちらか好きなテーマで書くことを指示。題材決めをやらせる。

《第二時》 下書き開始。未完成は宿題とする。

《第三時》 下書きを友人同士で交換し、相互添削させる。納得出来たものは清書。

《第四時》 できあがった文集をもとに出席番号の一つ前の友人の作文を評価させる。また、最優秀作品を選ばせる。

《第五時》 最優秀作品の表彰。

三 演習の結果と考察

始めは難色を示す生徒が多かった。これはテーマが指定されたこと、しかも「父」という書き辛いテーマであったことが考えられる。(あの……)というテーマは「父」というテーマで書けない生徒のための逃げ道として準備したものだ。しかし、演習がすすみ、特に生徒相互の添削の段階になると、教室は活気あふれるものとなった。また添削者名は明記させたので、読む方も読まれる方も真剣であった。その間指導者は適当な助言を与えな

がら、全体の進行に注意するだけで、生徒の添削の内容自体はほとんど触れていない。評価も完全に生徒の手で行った。演習最後の表彰式は楽しく盛り上がるものとなり、まずまずの手ごたえを感じることが出来た。

演習後のアンケートを分析すると、一三〇名中、「面白い」↓二人(一七、七%)「やや面白い」↓七七名(五九、二%)、「ややつまらない、つまらない」↓三十名(二三%)という評価であるが、この演習が「自分のためになるか」という質問に対しては九六%の生徒が「ややためになる、ためになる」という高い評価をしていた。

四 演習の反省

この演習は私自身が考えていた評価の重要性を確信させるものであった。この演習が面白くない割りには役に立つと評価されているのも、この友人からの評価によるところが大きい。クラス一位を決めることはお遊びであったのだが、結果として文集に総て目を通すこととなり、また高い評価を得た生徒には自信につながったようだ。最も作文の水準は高いとはいえない。添削にせよ、評価にせよ、生徒の力量以上のものは生まれては来ない。初歩的なミスも存在する。しかし、これだけの生徒の作文を添削しようと思ったら、とても出来ることではない。たとえ書かせても、それだけに終わってしまうことが多い。しかし、この方法は忙しい教師にも実行出来、しかも生徒の満足度が高い。予期しなかった効果として、文集化のため作文の提出率が上がるということがあ

る。(遅れたとしても百%である。)この方法に加え、年に何回かは教師による添削指導を行えば、かなりの量の作文をこなすことが可能であろう。二学期当初のこの演習はある意味で「賭け」だったのだが、次の演習につながる活気がうまれたということ、私にとって意義深いものであった。

(3) 緊張感と戦える力を「青年の主張2」の構想まで

二学期はその後二つの演習を実施した。俳句集製作、評論文構造図化)二つとも個人の力の充実を狙ったもので、クラス、授業とも一応の流れができてつづつあった。授業だけでなく勤労体験学習、演劇鑑賞、遠足等の行事が多く、慌ただしい中にもクラスの雰囲気を取り上げる機会は多かったと言えよう。そんな中で、私が担任している二組に問題が生じたこととなった。一学期以来病氣(過敏性大腸炎)で欠席がちだったK子が十一月末より完全な登校拒否症を示すようになってしまったのである。彼女は見掛けは大変明るくはきはきとしていたため、学年の前半は、欠席も単なる体調不良のせいであると考えていた。しかし、面談、家庭訪問を繰り返すうちに、原因は彼女自身の内面的なもの、特に両親との関係にあることが判明して来た。父親の存在の希薄さ、病弱な母親と密着しすぎている母子関係。はきはきしているようで、他人に依存しなければ生活出来ないことが問題だと考えられた。彼女のもつ甘え(母親も娘に甘えているのだが)を断ち切り、自立を促すことが必要であった。担任、カウンセラー、養護教諭、そしてクラスメートの総掛かりで彼女に取り組んだ。言わば彼女に

振り回された訳だが、お陰でカウンセラーの先生や養護の先生と話す機会が多く、生徒達の陰の側面をかなり知ることが出来た。私のクラスに限らない、保健室症候群と呼ばれる生徒たちの存在。K子のことを心配し、電話を掛け、面倒を見られる生徒たち自身もK子と同じ弱点をかかえているという事実。登校拒否予備軍ともいべき生徒の数の多さに私は愕然とした。例えば、模擬試験のたびに欠席する子。嫌いな試験や教科のたびに腹痛や頭痛に襲われる子。プレッシャーに弱く、同じ弱さをもったもの同士が肩をよせあっている。クラスのそんな実態が明らかになって来た。このような生徒の実態を見ているうちに、私の内部ではプレッシャーに負けて欲しくない、プレッシャーに負けない力を育てたいという気持ちになってきていた。本校の性格を考えれば、緊張感や不安を解消することは不可能である。完全な受験校である本校では、三年生に進級したならば、不安感の高まりこそすれ解消されることはありえない。プレッシャーに耐え得る強い心がどうしても必要である。これは、高校生を総て鉄の心臓と鋼の神経を持った人間に育てようというのではない。タフな神経が鈍感な人間を意味するのなら悲しいことだろう。自分や他人の心の痛みを感じることができない人間を育てようとする教育者はいない。しかし、この痛みを感じつつ、耐えながら生きて行かなければならないのも事実である。学校だけでなく、現代社会自体がストレスの塊みたいなものだから。

かといって、ここで担任が、耐えろ、頑張れと叫んだところで何が変わるだろう。生徒の側に聞く態勢ができていないときに、

教師がいくら語ったところで、言葉は生徒の心に届かない。生徒の心に言葉が伝わったと感じることができる瞬間は授業の場において他には考えられなかった。そこで私は生徒たちにプレッシャーを与え、逃げ場をなくし、とことんまで追い込んで見る、そのような演習を行ってみたいと考えるようになった。

また、二学期後半の演習（俳句集製作、評論文構造図化）が個人を中心とした演習ばかりであったことも不満であった。これはK子のことも一因である。クラスは不思議なもので、欠席が一人もないと自然と活気づいてくる。反面長欠者、とくに明らかに登校拒否である生徒がいた場合、その影は生徒に微妙に影響を与えるものだ。グループ学習などに踏み切れなかったのは、適当な教材や時間がなかったこともあるが、全体を意識させる学習をすると、K子が欠けている喪失感が強調されるようでいやだったのである。しかし、こちらの方も逃げてばかりはいられなかった。一年次のこの時期は、全体から個人へ、という流れであったが、二年次の今は個人の力を全体の成長へとつなげる流れの中にあつた。

このような状況で三学期を迎え、いよいよ最後の演習に突入する時となった。最終演習が「青年の主張？」になることは数カ月前から予告済みであったので、今回は前記の思いを達すべく、「青年の主張」の名前どおり、弁論大会を実施することとしたのである。すなわち、個人弁論という場に生徒を追い込み、わざと圧力をかけ、それをねのける力をつけさせよう、そして、個人個人の思いを全体に昇華させようと考えたのである。

(4) 個人の思いを全体へ―「青年の主張」弁論大会―

一 指導の実際

意見文集自体は昨年も製作しているので、各クラス三分の一程度の生徒は経験済みであった。今回の中心である意見発表は、一時間に五名ずつ計九時間で、発表順はくじ引きで決めた。発表の際は原稿を見ることを禁止し、聞くほうもメモを取ったり、下を向くことを禁止した。評価は審査用紙を使い（資料②）一人一人評価した。四十六名のクラスならば、一人の発表につき、私を含めて四十六人分の評価が下される。最終的には随想集と同じく、クラスの最優秀弁論を投票によって決定した。

第一時は予期したとおりの拒否反応ではあるが、かなり以前から覚悟させていたことでもあったせいとか、作文製作は順調にいったといえよう。題目設定↓下書き↓清書の各ステップで指導者がチェックしていった。これは、総ての生徒と面談するような作業なので大変ではあったが、一年次のような意味不明の作文を書いてくるような生徒は少なかった。作り上げることで殆ど力を使い果たしてしまった一年次からすると格段の進歩であった。またこの時期ともなると、生徒も演習があることに慣れてしまい、抵抗を感じなくなったことも原因だろう。

弁論の発表は思ったより時間がかかるものであった。一時間に五人しか発表させなかったのは、聞くほうの緊張感が維持出来るのは五人が限界であると判断したからである。私は敢えて緊張感

が高まるようにし、聞くほうと話すほうの真剣勝負となるように演出をした。

実際の弁論は、意外なほど生徒はよくやった。特に普通クラスの二・四組の健闘は感動的であった。二組の場合、例のK子は発表前にクラスに復帰していたが、一部の授業だけ、しかも不定期という状態であった。そのため発表表に参加出来るかどうかは不安であった。発表の日授業に彼女の姿を見付けた私はホッとすると同時に不安でいっぱいだった。これは彼女も同じだったのだろう。いやそれ以上に緊張していたのはクラス中の生徒たちだった。この時私はクラスの生徒と同じ気持ちを感じ取ることができたような気がする。彼女の弁論題目は「2年2組」。自分の病気のことを語り、クラスメートへの感謝の気持ちを書いたものだった。彼女が感極まって泣きだしてしまい、言葉に詰まっても、生徒は心の中で声援を送ったことだと思う。彼女が無事発表を終えたとき、幾人かの生徒は涙を浮かべていた。私は、彼女がこれで何か一つ自分の壁を乗り越えられたのではないかと感じる事ができた。(後日の投票票で、彼女の弁論は第一位となり、旧友の祝福をうけた。)

やっとな授業に食いつきを見せてくれたのも四組らしいといえるかもしれない。

三組はというと、ここは個人的には一番面白くなかった。いわゆる「いい子」の弁論が多く、そつなくこなしている感じがあった。勿論それなりに個人の本音をのぞかせているものもあったが、二・四組のドラマティックな発表と比較すると、今一歩だったといえるだろう。今の高校生は、なかなか自分の考えを人前で言わなくなってきたが、三組のような選抜クラスのものには、特に失敗を恐れる傾向がある。このようなクラスから本音を引き出すためには、発表題目や、内容に対して、指導者側からの揺さぶりが必要であろう。(同様の演習を、翌年十月三年理系の選抜クラスで行ったが、これはかなり本音が聞け成功だったことから、事前指導しただいでもっと劇的なものになる可能性がある。)

二 「青年の主張」演習の考察

アンケートの分析をすると、「面白さ」ためになるか」の両項目とも、積極的評価が九七%以上であり、この演習が本年度で最も生徒が充実感を感じたものであるということが出来る。その原因を分析してみる。

1 意見発表する魅力

今回の演習は弁論がすべてであるといつて過言ではない。意見発表はこちらの狙い通り生徒に大きな緊張感を与えたようだが、それだけに発表後の充実感につながったようだ。また内容を規制しなかつたため、校則・教師への不満なども飛び出したが、言い

たいことが言えたという満足感もみられた。不満足な者は、後半の友人の弁論に触発されて、もっと違うこと、もっとうまく言えば良かったという後悔がほとんどであった。

2 意見発表を聞く魅力

人の意見を聞くということにこれほどの集中力と喜びを感じてくれるとは考えもしなかった。生徒は友人の弁論の一つ一つに丁寧な感想を書いていた。自分の弁論に、全員が感想を書いてくれたことに感動している生徒が多かった。

3 評価される魅力

前述のように、友人の感想がすぐ返ってくるというのは魅力であったようだ。また、後日行った、最優秀弁論を選ぶ際も、真剣に取り組んでくれた。

4 文集製作の意義

弁論はその場限りのものであるが、今回の文集がその原稿であるため、その文集をもとにした評価が可能であり、友や自分の弁論の記念ともなる。空欄は個人のパフォーマンスの場として、それぞれが個性を発揮してくれた。

5 自分達の現状への疑問の発見

弁論の場で、初めてまじめな意見を言った者、また友達の違い側面を見た者は、それぞれ感動とともに、このような場を設定されないとも語れない自分に寂しさを感じていた。生徒は、本音を語りたく、同時に本音を聞きたいのだ。何も言わない、無口な生徒のではなく、本当は言葉を交わしたいがっている。ただ、その術を余りに知らなすぎる。その証拠に、「この演習で初めて友人

の声を聞いた」というものが大勢いた。また、友人の顔をじっと見るのが初めてだという者もいた。クラスとは名ばかりで、言葉も交わさず、黒板と教師とのみ向かい合っている現代の高校生の実態を見たことに、私は驚きと同時に、そのような授業、クラス運営しかしていない自分達教師の指導の不備をも指摘された気がした。「もっと皆と話したかった、クラスがばらばらになるのは残念だ」という生徒の後悔は、私自身の後悔でもあった。

三 演習のまとめ

緊張感に耐え得る力をという目標がどれだけ達成出来たかはわからないが、今度のもっとうまくできる、という生徒が多かったので、それなりの効果はあっただろう。クラス作りと国語科の指導との関連についても、かなりの手ごたえがあった。授業の最後に「青年の主張」巻末にそえた茨木のり子氏の詩を朗読したが、かなりの生徒から反響があったことを考えると、私のどんな説教よりも生徒の心に浸透したことと思う。クラスのあたたかさ、級友の力の大きさを実感することもできた。このような場合、教師はただ傍観者であるだけでよかった。このような場合、授業をしていただけでは、決してこの体験はできなかつたことを考えると、指導者の責任を痛感し、反省させられる出来事であった。

弁論大会自体は意義があることであるのは間違いない。しかし簡単に出来ることではないのは事実である。問題点としては、大量の時間を必要とするため、一般の授業に影響が出ることだろう。私の場合、演習を想定して授業の進度を速めに行っているのだが、

それでもぎりぎりであった。一般的には、時間のためにやりたくてもやれないというのが実情だろう。もっと力を抜いた簡単な形で数回行った方が実際の効果はあるだろう。実践が「これだけ」になってしまったら単なる打ち上げ花火にしかすぎない。「これから」の大切さを実感した演習であった。

四 全体のまとめと今後の展望

以上が私が国語Ⅱで行ってきた一年間の実践の総てである。反省点は山のようにある。演習という授業形態は活気があるものだが、それ意外の場、いわゆる普通の授業につながるにかなかったこと。演習はいわばホームランであり、場合によっては試合の流れを一気に変える起爆剤だが、やはり毎回安打が欲しいところだ。私には地道かつ長期的な視野にたつ実践が不足していると思う。また、現代文にはかり偏ってしまい、古文、漢文の演習はまったくできなかったことだ。一年次の漢文演習が生徒に好評だっただけに、なんとかしたいと考えたのだが時間的制約もあり、いいアイデアが浮かばなかった。古文、漢文の授業の活性化が今後の課題だろう。

その後、登校拒否のK子は出席日数ぎりぎりでなんとか進級することができた。その後私の授業クラスから離れたが、完全に立ち直り、立派に卒業することができた。彼女はこのクラスにいたことへの感謝の気持ちを述べてくれたが、彼女のお陰でクラスは団結することが出来たともいえるので、その意味ではこちらが感

謝したいほどだ。

戦いの日々であった四組も、転動していく先生に花束を送るなど（最も迷惑をかけたクラスであった謝罪の気持ちを込めて）最後には時折感動させるクラスとなった（悪ガキだが憎めないといったところだろうか。）

こうして振り返ってみると、クラス運営で苦勞の少なかった一年次に比べると、二年次は言わば事件の連続であったため印象深いことだらけだった。逆にいえば、苦勞しただけに、学ぶことも多かったと思う。

私は活気のある授業を追及し、活気のあるクラス運営が活気のある授業につながることに気付いた。しかし、活気のあるクラスを作る力は、学校行事、生徒指導、部活動だけではなく、むしろ日々の授業の中にある。クラス運営と授業は別ではなく、授業の活性化がクラスを活性化する道である。このことは私自身にとっては大きな発見であったといえよう。考えればあたりまえのことなのかもしれないが、授業が総ての基本なのではないだろうか。

結局、活気のある授業とは何か、それは私自身にもまだよくわからないことだらけである。しかし、その一部にでも答えを出すとするならば、生徒に学ぶ喜びを与えられたか、ということだろう。生徒が主体的に取り組み、疑問や葛藤を持ち、そしてある成果に到達させ満足感を与えたとき「活気のある授業」が達成されたといえるかもしれない。しかし、現在私は彼らに苦痛を与えることが殆どである。「演習」で見られる活気も、他の教材になると火が消えてしまう。学ぶ喜びとは縁遠い授業をしている。長打狙

いではなく、単打の連続のような「活気のある授業」。現代文、古文、漢文が関連を持ち、高めあう授業。これは今後私が追い求めなければならぬ重い課題である。

(都城泉ヶ丘高等学校教諭)

〈資料1〉「青年の主張」目次

二組

- 人間解析
- 学校改革
- 人の死について
- 部活動
- 今の映画を考える
- ラーメン
- 日本列島改造大作戦
- 自分の将来
- 美しいものを知る
- 根性
- 学歴社会について
- 人生の主人公
- 校則について
- 不得意教科の克服
- 農業問題について
- 学歴社会について

- 安藤 孝治 1
- 市来 尚志 2
- 稲盛 裕司 3
- 内柁保雄一 4
- 内山 英朗 5
- 大久保広和 6
- 加藤 寛昭 7
- 酒井 誠一 8
- 田島幸一郎 9
- 田平 潤 10
- 豊丸 健 11
- 中島 明彦 12
- 中島 哲也 13
- 長田 顕慈 14
- 橋口 淳也 15
- 丸田 和輝 16

- 私の住む街
- B A S E B A L L をやる為に
- 転校して得たもの
- 看護婦について
- 食生活が危ない!
- 「自然破壊」を考える
- 高校生活について
- ペットについて思うこと
- 学歴社会
- 心のカタチ
- 結婚
- 2年2組
- 小さな恋人たちへの思い
- 「内と外」
- ドライバーについて
- 消費税の導入
- 夢
- 世渡り上手
- 人を好きになること
- 辞書
- 自分の本当の夢
- 自信と努力
- 規格
- 一つのメルヘン

- 南屋 和寿 17
- 吉村 孝博 18
- 安室 道代 19
- 安藤 美香 20
- 岩満真理子 21
- 梅元 由加 22
- 鬼塚 五月 23
- 片蓋百合子 24
- 神 葉子 25
- 切原 朋子 26
- 倉山 真紀 27
- 迫園 直美 29
- 瀬戸口美和 30
- 高星百合子 31
- 竹脇 規子 32
- 田代裕衣子 33
- 田実久美子 34
- 立本 瑞枝 35
- 田畑 早苗 36
- 津田亜希子 37
- 津曲 章子 38
- 時任みちる 39
- 仲尾 陽子 40

将来の夢

親友に出会って

自分らしさを失う女性雑誌

話すときには気をつけて

私たちと政治

時間の使い方

三組

高校の学習と大学進学について

自分に必要なこと

自分のために

物の大切さについて

喉もと過ぎれば

日本の発展

社会について

今の教育制度について

「統ける」ということの難しさ

自然破壊について

戦争

陸上競技について

性格に対する意識の必要性

日本政府

人間の生活とは

このごろ思った事

中村 昌美 41

長沢 都 42

平川美千子 43

別府 朋子 44

松元 直 45

溝口 裕子 46

池田 宜永 47

出水 直樹 48

井戸川 洋 49

大山 裕史 50

小野 哲也 51

上水 孝治 52

蔵元 健一 53

河野 洋一 54

嶋田 純也 55

島田 隆一 56

田中 博優 57

徳永 邦弘 58

中村 浩 59

西田 徹 60

平原 英樹 61

平山 俊弘 62

高校生活

努力・才能・自分

私の考え

山に学ぶ

英語の必要性

生き方

残りの高校生活

人生の夢：高校生活

十七歳

自然破壊

「日の丸」君が代」強制について

人間同士のつき合いと演技

自分をどう伝えるか

人権の尊重

命の尊さ

これからの高校生活

科学技術の発達の中で

前田 謙二 63

村上 隆啓 64

森木 義彦 65

矢野 俊一 66

山波 秀樹 67

吉田 末広 68

吉村 守 69

渡辺 尚之 70

池田 優子 71

岩崎貴美子 72

榎並麻里子 73

大川千佳子 74

落合かず江 75

上森 和代 76

川添 恵子 77

黒木 真紀 78

児島 素子 79

評 価	講評・メモ
① (4 8 12 16 20)	声もあってよかった。
② (4 8 12 16 20)	おろついていたので、尊敬さ
③ (8 16 24 (32) 40)	感動した。私は、内容聞いてうれしかた
④ (4 8 12 16 20)	

◎総合得点 70点

◎所見・感想

・ てい chan くんがにも良い文章が書けたんだから、私は "す" いぶんふ、それなんだね、と思いました。これから、自分のことを冷静に見つめていくと、いいよ。もうちょっとだ、お互い、がんばろうね。

◎感想 (具体的に)

友達の様々な考え、思いを真近で感じとることかできました。普段、冗談ばかりやって、こんな風に友達に胸のうちを聞くことが少い私にとって、とてもためになる演習でした。共感したり感動したり、関心したりで、ほっとするひまありませんでした。それと自分の感想を書いた相手に渡すのは good idea だと思っています。自分の考えが相手にどのくらい伝わり、どんなに相手の心を動かせるか分かる、いい経験になりました。また、それ以上に、2年3組にはこんな友達かいたんだと思わせるものが欲しかったので、1人1人からの感想文は私にとって、宝物くらい大切なものとして残ると思っています。と "青年の主張" いい企画、を、ありがとう、でした。